

釧路湿原自然再生協議会 再生普及小委員会  
第16回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ議事要旨

■日時：2023年1月10日（火）10:00～12:00

■場所：釧路地方合同庁舎5階 第一会議室

■出席者：（敬称略・順不同）

<専門家>

- ・高橋 忠一（再生普及小委員会委員長）
- ・境 智洋（北海道教育大学釧路校 教授）

<学校教員>

- ・釧路市立中央小学校 石川 慎吾
- ・釧路市立新陽小学校 柴田 康吉、大澤 純平
- ・標茶町立標茶小学校 福岡 徹
- ・鶴居村立幌呂中学校 長谷 泰昌

<学校教育行政機関等>

- ・釧路市教育委員会 学校教育部 教育支援課 指導主事 関本 裕介
- ・釧路町教育委員会 教育部 指導主事室 室長 國井 彩子
- ・標茶町教育委員会 指導室 指導室長 秋山 豊
- ・弟子屈町教育委員会 指導室 指導室長 武田 進一
- ・釧路湿原国立公園連絡協議会 事務局次長 元岡 直子、事務局員 松橋 由希
- ・釧路市こども遊学館 事務局長 小笠原 忍、学習担当 古野 峻也

<ワーキンググループ事務局>

- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 瀧口 さやか、岩下 美杜
- ・公益財団法人北海道環境財団 山本 泰志、安田 智子

■議事次第：

1. 開会
2. ワーキンググループの取組報告
3. 今後の取り組みについて
4. その他
5. 閉会

## ■議事概要

### 1. 開会

《配布資料確認》

### 2. ワーキンググループの取組報告

事務局より資料1について説明。各取組みに関係する委員から補足の発言を得ながら、意見交換を行った。

#### 1. 湿原を題材とした学習素材の収集、活用の促進

《委員からの補足、主な意見》

- ・小学校でのキャリア教育は特別活動に位置づけ何らかの形で行っており、キャリアパスポートという形で高校まで引き継いでいくことになっている。
- ・子どもたちは身近に多くある仕事に気づかない。中央小学校6年生の湿原学習は、昨年度学習した湿原学習と絡めることで、こうした仕事があるという気づきの段階の学習となった。
- ・キャリア教育は生き方そのものの学習で、将来の夢や目標を広げる学習。環境教育では自然には目を向けるが、関わっている人たちという視点が持てない子どもが多いと感じるが、自然に関わる人たちに目を向けることで、郷土にどう関わり生きていけば良いかを考えるきっかけになる。
- ・学校支援ワーキンググループ（以降、WG）設置から8年が経過して様々な立場や視点での関わりが出てきており、各者の役割の明確化や、各取組を大きく括った網羅的な整理をする時期にきている。その大きな枠組みの中で、例えばキャリア教育であれば5年生時点での視点やねらいなど、WGとして何をさせていくかが非常に重要。
- ・湿原で体験し失敗する中で得られる経験や考え方が重要で、自然の力強さや生き物たちの関わりを感じる事が出来る。キャリア教育も同様で、そこで生きている人は、その生き方をしているプロであり、釧路で生きている素晴らしさが伝わる。

#### 2. 自然再生の学校教育への活用促進

《委員からの補足》

- ・湿原を訪問した子どもたちは、自分たちの近くにあるものは守るべきだと言うようになった。自然に触れ合い実感を伴って調べていく中で心が成長していっていると感じる。

#### 3. 学校教員の関心喚起、湿原の教育的な価値の普及

《委員からの補足、主な意見》

- ・中央小学校5年生では、課題を具体的にするために2回目のフィールド学習を行った。関心を深めたり、新たな気づきがあり、フィールドに2回行く意味を感じた。
- ・質問がある子を限定してオンライン質疑の時間を取った。様々な助言をもらうことが出来、その後の学びにつながっている。様々な専門家とつながることができればなお良い。
- ・湿原学習交流発表会（以降、交流会）は、他の学年、学校の子どもたち同士の発表は初の試みであったが、良い刺激を得ることが出来た。下級生の発表は大変刺激となり、他の学校の取組はどのように探求していくかを考えるきっかけとなった。単学級で同世代との関わりがない子どもたちにとって、外への視点を持つ大きなきっかけとなった。
- ・交流会は他校の視点を感じる良い機会となった。研究内容をアピールする場は重要で、それを実現する一つのアイデアが出てきたことは成果である。
- ・各学校の地域性を踏まえた視点が交流会を通して交われば非常に面白い。視野が広がっていく効果的なツールである。

#### 《取組全体に対する委員からの主な意見》

- ・8年前のWG設置から取組みを進める中で、湿原を扱うことが学校教育の中で価値があるのではないかということが見えてきた。子どもたちの調べてみたい、やりたいということを実現出来る場所が湿原にあり、様々な探求的なプロセスを踏みながらも自分たちで自己解決していく姿が出てきた。湿原を扱うことは子どもたちの探求学習にとって課題を見つける段階で素晴らしい素材となる。
- ・日本の教育の次の時代は、自分で新しい課題を見つけ関わっていくということをやっけていかななくてはならない。湿原にはそうした素材が多くあり、先生もわからないことが沢山ある。そこがこれからの教育、学びの一つキーワードになる。もっと湿原を使うことによって探求的な学びを理解していく、探求的な力をつけていくことが出来る。
- ・WGに当初から参加しているが、釧路湿原の保全や普及を行う環境省が子どもたちにどう伝えればよいかということで、環境省と子どもたちに伝える側のプロである教育委員会や学校教員等が話をしている中で上手くつなげていこうということで始まったものと理解している。湿原に関わることの大切さと難しさは課題であり、学校だけで動かすことが難しい内容については、教育委員会からの支援や評価も学校の取組の後押しになる。
- ・湿原を素材として探求的な学習のあり方を学んでいる印象が強い。支援を受けている学校では探求学習が充実してきた一方、学校の取組として意識化していく必要がある。現在支援を受けている学校については、自身で探求的な学習をおこなっていけるようになって欲しい。
- ・釧路町の政策として、次年度は町内2つの小学校がノロッコ号で細岡に行く予定で、それ以降は全ての小学校が細岡に行く計画を立てている。湿原に行くことを探求活動の入り口にして、総合学習につなげる、現在の学習を見直して教育課程に組み込むことをしていきたい。可能な限りWGの力を借りたいと考えているが、今後どのようにいろいろな学校に支援を広げていくのか、いかないのかということについて方向性を聞きたい。
- ・価値づけをどうしていくかをいつも考えている。標茶町が行う故郷教育としてのカヌー体験と、学校が行う湿原学習、教科学習が、学校計画の中で結びついていかなければならない。組織の中で詳しい先生がいなくなっても計画の中でやっていくということが重要になる。
- ・湿原学習のポイントとして、体験を土台として探求する力を身に付けさせたいという部分は共通理解としたい。大きな目的を常に意識しておくことが重要。五感で感じることを大切に課題を見つける力にしていくことで、将来様々な困難に遭った時に解決していける人に育っていくのではないか。
- ・子どもたちの成果をアピールする場を持つことは価値づけとして非常に大切で、合わせてWGの取組の発信も必要。取組が十分に知られていないのではないか。
- ・弟子屈町では各学校で総合的な学習を中心に探求的な学習を進めており、町のバスを利用できる。町としては総合的な学習において小中高で一貫した流れを作っていこうとしており、段階を追った意味付けを行い整理していこうとしている。
- ・交流会があるから交流しようというのと、自分たちが調べたことを発信したいからどうしたら良いかというのでは、同じことをやっけていても意味合いが違う。探求的な学習では子どもの試行錯誤が大切で、形作られてしまうと試行錯誤できない。今後のWGの方向性として、裾野を広げるとともに、必要な時に必要な支援が出来る組織であってほしい。
- ・釧路湿原国立公園連絡協議会（以下、連絡協議会）としては、成果のアピールの部分で協力が可能と考える。
- ・WGの方向性として取組を広げていけるのかいけないのか整理することが必要。それに合わせて連絡協議会としても協力体制を構築出来ないかと考えている。
- ・釧路市こども遊学館（以降、遊学館）での展示は、地域住民の生涯学習の場となっている。子どもたちの研究成果こそが地域の最先端という形で発信し効果的な事業になっている。子どもたちへのフィードバックが課題であるが、遊学館での口頭発表会を企画しており、地域の方々から聞いてもらえる場として効果的だと考えている。総合の指導要領の中で示される社会

参画の部分を遊学館で担えればと考えている。地域の湿原を発信する、釧路の探求学習のレベルを上げるという意味で、2つの軸でやっていきたい。

- ・家庭での環境、学びがとても大切であり、幼稚園等に通われるお子さんが多く来館される遊学館で、地域の小学生の学習成果を保護者も一緒に見て、自然や湿原から私たちが受ける恩恵を直に感じてもらえるきっかけづくりを続けていきたい。子どもたちの研究成果を更新しながら展示を続けていくこと、口頭発表という形でも継続して関わらせて頂きたい。

### 3. 今後の取り組みについて

事務局より説明後、来年度以降の取組に対する意見交換を行った。

- ・初任段階の先生への普及や、教員を目指す大学生に現場が見えてくるようになれば、今後の若い先生方も目を向けていけるのではないかと。先生方のノウハウの育成をお願いしたい。
- ・探求で何をしたら良いかを学ぶ目的として、総合の研修としてフィールドに連れて行くという形で教員研修を企画するのも面白い。
- ・次年度は教育研究センターの講座で環境教育の充実をテーマとする講座を企画したい。
- ・環境省と教育委員会をお願いしたいことが3点。1つは、フィールドに入るための環境省からの許可と安全性の確保。2つめは、専門家とつながるための窓口。3つ目は、年2回の教員研修。
- ・専門家については、釧路国際ウェットランドセンターに技術委員会というものがあり、各分野の専門家がおり活用してもらえればと思う。
- ・若い先生が総合で湿原学習などをやりたいと言った時に、話を受け入れてくれる対話的な学校風土が重要。フィールドを用いた学びを推進していることを、教育委員会から各学校長に下すことで、学校長の段階でストップがかかることも減るのではないかと。
- ・支援して欲しい人の声を聞くことが大事だと考えており、先生方の意見に関心があった。学校で理解を深めるために、教育委員会として自分も発信出来る立場にあると改めて感じた。
- ・現在の取組にコミットする学校が増えれば、学校間で連携することもできる。子どもたちがやりたいこと、一緒にやりたい学校を選択していけるような形になると面白い。
- ・今年度は4校での交流会となったが、もっと多くの学校が参加出来るようになれば良い。
- ・ラムサール条約締約国会議の釧路での開催から来年度30周年となり行事を行う予定。その中で子どもたちの発表の機会が設けられればと考えている。
- ・発表する場の設置、多くの学校が参加出来るようにするための課題を整理頂き、協力出来る部分を考えていきたい。
- ・小中高の教務担当者と話し合う機会があり、現場の声を吸い上げて必要に応じて相談したい。
- ・授業の中で遊学館を活用する場合にも臨機応変に対応したいので意見を聞かせてほしい。
- ・将来的に学校や湿原教育を支えるシステムをきちんと作った方が良い。学校の意見を聞きながら講師の配分や教材の共有が出来、学校の年間の活動内容が見えてくる。
- ・探求学習は今後充実させていかなくてはならないし、子どもたちが身に付けていかなければならない力。その力を育成するために釧路がこうした取り組みを行っていることは全国に発信出来る内容であり、今後は釧路サイエンスフェアという形で出来れば、釧路全体の子どもたちの発表の場というものも出来るかもしれない。釧路にいる子どもたちの探求の力を付けていくという大きな前提を持って出来れば良いと思う。北海道には発表の場はなく、それが釧路から始まるということは意味がある。発表の場というものを大事にしたい。

### 4. その他

意見無し

### 5. 閉会